

法科大学院LMS用コンテンツとしての授業収録

伊藤 博文

1. はじめに

本報告書は、「平成19年度 教育学術情報データベース等の開発」の1研究テーマとして研究助成対象となった「法科大学院LMS用コンテンツとしての授業収録」の研究成果を報告するものである。

この研究テーマ「法科大学院LMS用コンテンツとしての授業収録」では、e-Learningのコンテンツ作成を主眼としており、次のような計画であった。

本研究では、近時注目の集まっているLMS(Learning Management System)のコンテンツとしての授業収録を組織的に行うものである。ブロードバンド時代において法学教育のあり方も変革を迫られる中、愛知大学法科大学院でも、より効率的な法律学習の手法を検討している。本学では、LMSの中でもMoodleを使ったe-Learningを展開することが全学的に採択されており、そのMoodle上に載せる授業コンテンツとして、法科大学院の講義内容をビデオ収録して、Moodle用のコンテンツとする。ビデオ収録は、法科大学院生などのPA(Project Assistant)を雇い入れ、特定の講義を15回分すべてビデオ収録して、次年度からのコンテンツとす

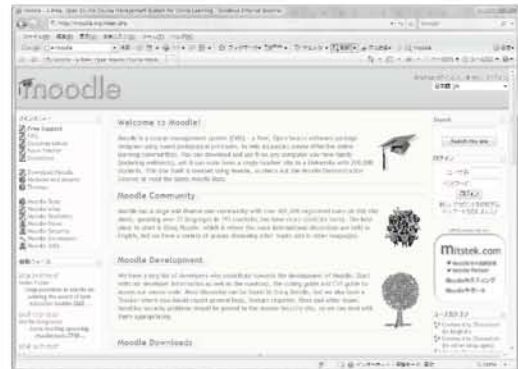


図1：Moodleのトップページ
<http://moodle.org/>

る。

本コンテンツの教育研究上の効果は、以下にある。

コンテンツ作成における授業収録が成功すれば、Moodleを使ったe-Learningが可能となり、法科大学院の目指す自学自習に大きく寄与できる。LMSを使うことにより、(1).学習の進捗・成績管理、(2).受講者の管理、(3).教材の配信・管理、(4).教材コースの作成・受講登録・管理が可能となり、より質の高い法学教育環境を提供できることとなる。LMS用のコンテンツ作成にあたり、一番困難なものは授業そのものを収録することであり、その手間は教員個人ができる作業ではない。これを組織的に行える組織とそ

の資金的バックアップがあれば、これがモデルケースとなり、他の教科、他の学部にも応用でき、愛知大学全体の学習環境向上に貢献できる。また授業収録することは、他の教員への波及効果も大きく、FD(Faculty Development)活動にも寄与できる。

2. 実施内容

この研究「法科大学院LMS用コンテンツとしての授業収録」では、Moodleによる情報発信ができる環境を前提として、そのe-Learning用コンテンツを作成することが、主たる

作業内容である。つまり、講義のビデオ収録と動画ファイル編集作業(データ変換および加工)等が主たる作業となる。あわせて、LMSコンテンツ構築の参考図書およびソフトウェアを購入して、逐次関連知識を習得しながら研究を進めるという形をとった。

具体的には、法科大学院所有のデジタル・ビデオカメラを使い、法科大学院で実際に行われている講義を収録することが中心作業となった。この作業では、法科大学院生を作業補助員として雇い、以

下の講義を収録した。2007年度春学期は、民法II、刑事訴訟法、刑事法概論、刑法演習、行政法、同秋学期は、ローヤリング、刑事訴訟法特論、特別刑法、法文書作成、法務総合演習の講義を収録した。

作業としては、PAである4名の法科大学院生に収録作業を分担させ、講義をビデオ収録した。

3. 成果

本研究の成果は以下にあると考えている。法科大学院で提供される全ての講義を収録できたわけではないが、一部にせよそのノウハウを得たことは大きな収穫

だと考えている。授業収録と一口に言ってもさまざまなノウハウが必要となる。収録するマンパワーの確保、延長もあり得る90分の講義をMpegファイルで収録する機材の確保、受講者の迷惑にならないカメラの設置場所の確保。一点集中の録画にするか、ズームを入れるか否か。双方向の講義であれば教員だけではなく、院生の顔も撮るとしたならば、カメラの設置位置はどうするのか。教員および受講生からの音声をどのように拾うか。ビデオカメラからのデータ吸い上げ作業を

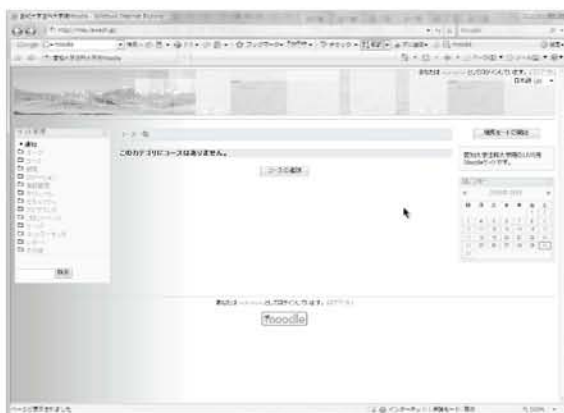


図2：愛知大学法科大学院Moodleサイト
<http://mau.lawsch.jp/>

どのように迅速に行うか。この収録した全てのファイルを吸い上げて総計約300ギガバイトにもなるデータをどこに保存するのか。ストリーミング出来るようにmpegファイルを変換する作業を

どのように行うか

等々、数多くの問題に出くわした。
また、教える教員側からもFDとしての効果があったことも挙げなければならない。何人かの教員は、講義ビデオ収録を拒否されたが概ね殆どは快諾していただき、その収録された自分の講義を見て、講義を見直す機会となったことは事実である。自分の発声や板書が受講生にとって効果的なものであったか否かがよくわかる。こうした講義のビデオ収録にはFDとして高い効果があることが判明したのも大きな成果である。

4. 今後の課題

今後の課題は種々あるが、主たるものを以下に列記する。



図3：ビデオ収録した動画ファイルをTMPGEnc MPEG Editor 2.0を使って編集している様子。

4.1 継続性

今回の研究助成は単年度のもので単発的な研究であり、次年度以降は同様のビデオ収録を続けていくことは、何らかの支援がなければ、困難である。単発的な実験ではあるが、収録することの意

義は十分見いだせたことを生かして、次に繋げていこうと考えている。

4.2 教材化の手間

講義の様子をビデオ収録して、Moodleに載せて教材化するまでには至っていないのが実情である。サイト自体は立ち上がっており(図2)、教材の作り込み作業が必要な状況である。ここで一番大きな問題が、ストリーミング技術である。Moodleのサーバー構成では、そのまま90分にわたる講義を何本も流せるほどのストリーミングに対応ができていない。これには、別途ストリーミング・サーバーを立ち上げて、円滑に動画配信ができる環境が必要となっている。

4.3 著作権処理とセキュリティ

今回の収録したビデオ画像の著作権は、当然担当教員に帰属するものであるが、一旦オンラインで配信されるとなると、不正コピーなどの問題が生じる危険性がある。これをストリーミング・サーバー上のセキュリティ技術で保護しようとするが、認証技術にも限界があり、頭を悩ませている。つまり、見せたい人だけに見せて、見たものが閲覧者の手元に残らないような配信を考えるが、自ずから限度がある。これは著作権だけの問題ではなく、認証によるセキュリティの問題も考えなくてはならない。

このような問題を抱えつつも、この研究を続けていこうと考えている。このような研究の機会を与えてくれた愛知大学に感謝したい。